機織りを通して世界を眺める
―小学校１年生の実践から―

居城勝彦（東京学芸大学附属世田谷小学校）

１．活動の経緯

本校の低学年は、全ての授業時間を総合学習と位置づけ、既存の教科・領域を踏まえながらより総合的な学びが展開できるようになっている。本学級の子どもたちは、何事にも「やってみよう」と好奇心旺盛である。１学期は総合的な学びの中で人生初である学校という社会に慣れることを最優先とした。子どもたちが安心して学校生活が送れるように、子どもひとり一人と教師とのつながりを意識し、学校生活のリズムを身につけることを活動の中心においた。２学期は学級での様々な場面において子ども同士で試行錯誤しながら生活をつくっていくことを大事にした。その中で見せる“その子らしさ”は子どもひとり一人が持つ文化の様相であり、それらをお互いにいかして生活していくことで様々な文化に対する寛容な態度を育てることにつながると考え、学級経営に取り組んだ。

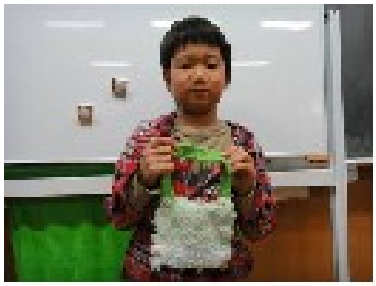
まずは、ギョレメ村の機織り[i]とインドネシア・スンバ島の家の中で描かれた機織りの様子[ii]を紹介し、機織りをやってみようと投げかけた。１人一台の機織り機（アーテック社製）と縦糸用の凧糸と横糸用の毛糸を一巻きずつ渡した。まず始めに、箱や道具に記名をしながら内容物を確認した。そして、実物投影機で指導者の手元を映しながら縦糸の掛け方とそうこうの準備を示して１回目の活動は終了した。次の時間は毛糸を糸巻きに巻き、くしを使いながら織り始めた。この段階では、いわゆる教科学習での課題をこなす子どもの中に作業で手子摺る子どもがいた。何事にも時間はかかるが丁寧に取り組む子ほど、作業の進みが早かった。

始めは横糸の張り具合が加減できず、編み進めるに従って細い布が出来上がっていたが、誰かがそうならないための工夫を見つけると、子ども同士の中でコツが伝播し、自然と声を掛け合い教え合う関係が出来上がっていった。また、これまで活躍が認められることの少なかった子どもが、黙々と制作を続けて最も作品数が多くなり、周囲から一目置かれるようになった。

4.2 機織り活動の展開における手だて

機織り活動の展開に合わせて、学校図書館司書との連携で絵本の紹介を続けた。
以下が読み聞かせをした絵本である。

「おひさまいろのきもの」[iii]　「ペレのあたらしいふく」[iv]　「アンナの赤いオーバー」[v]



どの作品も機織りが出てくる場面は限られているが、機織り機が出てくる場面では子どもたちが食い入るように見ていた。また、自分たちが行っている機織りは素材から衣服が出来上がっていく工程の一部分であるということにも気づくようになっていった。それは、子どもたちが制作する作品がマフラーのように織り上げた布を長くつなげたものや、ポシェットのように用途に応じて縫い合わせた作品を作るようになったことからも見とることができる。また、毛糸になる前の工程であるスピンドルや糸巻き機によって糸をよる作業に関心を示す子どももいたので、動画によって紹介をした。

以上のような活動を通して子どもたちの身についた力として、以下の５つが考えられる。

（１） 集中し、自ら進んで取り組む力

（２） 自分なりの目的をもって制作する力（こんな布を織りたい　お母さんにあげたい）

（３）友だちに教える、あるいは教わる力　→　仲間とつながることの必然性

（４）創意工夫を真似する、あるいは伝える力

（５）ものごとの仕組みや作り方（糸紡ぎや機織り機の構造）に興味関心を持つ力

機織りを続けている子どもたちの姿には、デューイがその著書「学校と社会」で述べている「訓練を目的として学校でどれほどの感覚器官の訓練をやってみても、平常の仕事に日々身を入れ心を配ることによって得られる感覚器官の溌剌さと充実さには、とうてい匹敵しうべくもない。」という記述に重なるところが多い。

子どもたちにとって機織りが学校生活や家庭生活の一部となった１月中旬、世界の中に自分たち同年代の子どもたちが児童労働として機織りをしていること触れる活動を設定した。その展開は以下の通りである。

２. 自分たちの経験と結びつけながら世界を眺める

約３ヶ月間の活動を通して、機織りそのものの楽しさとそれを通して気づいた工夫、知らず知らずの間に身についた巧緻性により、機織りは子どもたちの生活の一部となっている。そこで、この状況を基盤として、世界を眺める学習を２時間扱いで計画し、実施した。

目標：自分たちの機織り経験と結びつけながら、世界の子どもたちの機織りについて考える。

	主な学習活動(◯)と子どもの意識(・)	指導上の留意点
第 1 時	◯サッカーボールについて考えてみよう。 値段はどのくらいだろう。 ・自分のボールは〇〇円くらいだったよ。 ◯たくさん作っている国はどこだろう。 ・日本が多いんじゃないかな。 ・パキスタンってどこ？ ◯どのように作っているだろう。 ・同じ大きさや色だからロボットが作っていると思う。 ◯どんな人たちが作っているだろう。 ・丸くするのは難しいから大人だと思う。 ◯一個のボールを縫うのにどれくらいかかるだろう。 ・慣れたらはやく作れそう。 ・作るのが子どもだから、うまく作れないかもしれない。	・アジア杯が行われていたことや子どもたちの遊びや習い事のサッカーからつなげて考えさせる。 ・値段、世界的な生産国、生産方法、主な労働者へと視点をつなぎ、自分たちと同じような年齢の子どもたちが生活のために作っていることに気づかせる。 ・国名や地域名などの細かな説明は避け、世界には自分たちと同じような年齢の子どもが働いているのだという事実を知ることを大事にする。
	◯これまでの機織りを振り返ろう。 ・いくつもの絵本に出てきたよ。 ・自分たちでもたくさん作ったよ。 ・木でできた機織り機の方が難しかった。 ・色々な作品ができたよ。	・これまでの機織り経験を作品や絵本から振り返り、はじめは大変だったけど徐々に楽しくなってきたことに気づかせる。
	◯世界の機織りを見てみよう。 ・自分たちの作品より難しそう。 ・小さな子どもも作っている。 ・この子たちも生活のためにしているの？ ◯「そのこ」という詩を読んで、何ができるか考えてみよう。 ・お金のくものすって何のことだろう。 ・自分にできることはあるかなぁ。	・世界には機織りやじゅうたん織りをしている子どもがいることに気づかせる。そして、そのほとんどが児童労働の過酷な環境の中で生活のために行っていることを知らせる。 ・谷川俊太郎作の「そのこ」を提示し、自分との境遇の違いを意識させ、今の自分の気持ちを考えさせる。
第 2 時	◯クレイグ少年のやったことを知ろう。[vi] ・働いている子たちが助かってよかった。 ・子どもが戦争するの？	・読み聞かせにより、児童労働から子どもを救おうとしたことや少年兵士と交流をもっていることを知らせる。 ・自分と同じような年齢の子どもが自分

		とは全く異なる環境で生活をしていることに気づかせる。

授業後の子どもの学習感想をいくつか紹介する。

「わたしは、よそのくにには おかあさんがびょうきだから、子どもがはたらいたり、子どもがサッカーボールをつくったり、じゅうたん、いとつむぎをしていることがわかりました。わたしはその子のためにはわたしのぶんをぜんぶあげるわけにはいかないので、ちょっとでもたべものやおかねをあげたいです。」

「ソニアちゃん（サッカーボールを作っている少女）はいっしょうけんめいつくっているのに、１５えんしかもらえないなんてずるすぎます。」

「はじめてしったことは、せかい中の子どもがはたおりしごとをしていることです。（中略）子どもがはたらいてお金をかせいでそのお金でおとなのひとがごはんとかいえのことにお金をつかって、なんで子どもがしごとなんだろうっておもいました。」

「わたしとおなじ年の人がわたしとちがってしごとではたおりをしている。でも私はたのしくやっている。そのちがうくにがそんなことをするなんて、はじめてきいてびっくりしました。いまかんがえていることは、その子のいのちをすくうために、コンビニとかでみんなお金を入れているひとたちのまねをします。」

ほとんどの子どもが児童労働の事実を、この授業で初めて知っていることがわかる。その状況に対してかわいそうだと同情したり、お金をあげることで助けてあげたいと考えていたりする。さらには自分（たち）のおかれた状況との違いについて気づき、自分のできる行動について考えている子どももいる。

第 1 時は保護者による授業参観の中で行った。子どもたちが素直に出す感想と児童労働に従事している子どもたちとの現状に、帰宅後も家族で話をしたという報告もあった。

小学校 1 年生という発達段階を考えれば、知ることあるいは意識するきっかけを持つことで十分だととらえている。今後の成長とともに、自分の視野が広がり、行動力も伴ってきたときの種まきとなる学習となっていることを期待する。

３．活動の考察

これまで担任した小学校低学年の学級においても、世界各地の伝承を題材とした絵本の読み聞かせや遊びの紹介などで、子どもたちが世界に目を向けることを狙ってきた。子どもたちはその時々で提示されたものに関心を持ち、楽しんで活動していた。発達段階からすれば、どのようなことも楽しめるのは自然なことである。ともすると、子どもたちはトピック的な取り扱いの連続の中で、世界と自分とのつながりをあまり意識しないまま活動をしていたのかもしれない。

しかし今回の活動においては、自分たちがそれなりの苦労をしながら機織りを経験したことの効果が２つの点で現れていると考えられる。まずは、機織りが子どもたちにとって容易ではなく、困難を乗り越えた上で楽しさを見いだした活動であることで、児童労働で機織りをしている子どもたちの苦労を体感的に理解しやすい点である。機織りそのものを楽しんでいる自分と世界の子どもたちのおかれている状況のギャップが葛藤場面となり、感じたことや考えたことを交流させることに必要性が生まれる。次に、教え合いや伝え合いを重ねながら経験したことで、仲間の思いや考えに共感的理解をしやすい点である。１年生の子どもたちにとって、児童労働は身近に感じることのない問題であろう。しかし、自分たちの経験を糸口として、自分たちとは離れたところにある、しかし同年代の子どもたちが置かれている児童労働という問題について、互いの思いを語ることが可能となった。

本実践を通して、小学校低学年期において自分たちの経験を足がかりとして世界を眺める１つの方法を見いだすことができた。活動そのものにある程度の困難と楽しさを兼ね備えていること、そしてその活動に十分にひたる時間を取ることが大切である。２年生に進級し、機織りを続けている子どもたちとさらなる展開と子どもたちからの発信の在り方を探っていきたい。

---

[i] 新藤悦子・西山晶絵「ギョレメ村でじゅうたんを織る」福音館書店、たくさんのふしぎ 1993 年９月号。
[ii] 小松義夫・西山晶「世界あちこち　ゆかいな家めぐり」福音館書店、1997 年５月。
[iii] 広野多珂子「おひさまいろのきもの」福音館書店、2007 年 9 月。
[iv] エルサ・ベスコフ著小野寺百合子訳「ペレのあたらしいふく」福音館書店、1976 年２月。
[v] ハリエット・ジィーフェルト作 アニタ・ローベル絵 松川真弓訳「アンナの赤いオーバー」評論社、1990 年 12 月。
[vi] クレイグ・キールバーガー著 中島早苗訳「キッズ・パワーが世界を変える　ークレイグ少年の物語ー」大月書店出版、2004 年、５月。